

令和2年度研究について

香川県小学校教育研究会体育部会

令和2年度研究主題

ときめき・きらめき続ける体育学習

－すべての子どもが、運動や健康について自ら見つけた課題を解決できる授業づくり－

1 研究の経緯

今の子どもが生きていくであろう社会（Society5.0）は、IoT（Internet of Things）によって全ての人とモノがつながり、様々な知識や情報が共有されることで、今までにない新たな価値を生み出す社会だと言われている。同時に、人工知能（AI）の技術革新が進めば進むほど、文化、芸術、スポーツ等の人間の創造力により生み出され、人々の共感を生みながら発展してきた分野がますます社会に求められるようになってくるとの予想も出ている。このような予測不可能で変化の激しい時代に求められる力として「①文章や情報を正確に読み解き、対話する力②科学的に思考・吟味し活用する力③価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探求力」が必要であると整理されている¹。他者と協働する力、思考する力、新しいものや変わっていくものに対する好奇心や探求力、これらを実体験から学んで自信につなげていく力などが重要であるということである。本年度から全面実施となる学習指導要領にも、生きて働く「知識・技能」、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の三つの資質・能力が示され、その育成が重要視されている。

その中で、香川県の子ども（5年生）の実態に目を向けると、令和元年の全国体力調査の質問紙の結果、「今、体育の授業で学習している内容は、あなたの将来に役に立つと思うか」「体育の授業で学んだことを、授業以外の時にも行ってみようと思うか」について「そう思う」と回答した割合は全国平均と比べて上回っているのに対し、「体育の授業ではたくさん動くか」「体育の授業では、授業の始めに授業の目標（めあて・ねらい）が示されているか」については、いずれも肯定的回答率は全国平均を下回っている。これらの結果から、学ぶ意義や学んだことの有用性を子どもが感じている一方で、運動学習量の確保や授業のねらいの明示化など、授業改善の必要があることが分かる。

昨年度まで、研究主題を「子どもと共に創る体育授業」と設定し、研究を進めてきた。「子どもと共に」というのは、「教師の学ばせたいこと（学習内容）」と「子どもの学びたいこと（「知りたい」「うまくなりたい」「できるようになりたい」という思いや願い）」とを合致させていくことであり、その授業づくりについて多くの実践を積み重ねてきた。本年度は、このような授業づくりの姿勢を継承しつつ、資質・能力のうち、特に主体的に学びに向かう力を発揮している具体的な子どもの姿を描くことから始めたい。その姿の実現のために、どのような教材設定や働きかけを行うことが有効なのかを検証し、研究を深めていきたいと考えている。

¹ Society5.0に向けた人材育成に係る大臣懇談会・新たな時代を豊かに生きる力の育成に関する省内タスクフォース（平成30年6月5日）より

2 これまでの研究の成果と課題

平成 26 年度から 6 年間継続して「子どもと共に創る体育授業」を研究主題に掲げ、研究を進めてきた。「学習内容の明確化→教材化」「単元計画の工夫」「教師行動」「評価」の子どもと共に創る授業づくりの過程の中で、「自己の運動やスポーツに対する思いや願いをもち、『見方・考え方』を働かせながら、課題を解決するために試行錯誤を繰り返し、発展的に考え、他者とかかわって学びを広げている子ども」の姿を多くの実践で実現することができた。また、子どもが課題解決を焦点化して行えるように、「動き（方）を思考するための視点」を意図的に取り上げ、試行錯誤が繰り返されるようにした授業も見られた。

しかし、課題としては、領域の特性を的確に捉えられずに「学習内容の明確化」が曖昧になっていたり、「動き（方）を思考するための視点」が、子どもが解決したい課題の解決に結びつかなかったりする実践が見られた。そのため、一見子どもの活動する姿は楽しそうに見えていても、領域で身に付けさせたい力の育成が図れていない場合があった。つまり、教師自身がどのような力を伸ばして欲しいかを具体的に捉えていない中で、子どもが活動している状態になっており、単元が終われば、その領域特有の面白さを深めるために自ら問いをもって解決に向かったり、試行錯誤したりするなど、学習意欲を育てることにはつなげていなかったということである。

3 研究主題について

(1) 研究主題

ときめき・きらめき続ける体育学習

体育の究極の目標であり、目指す姿は「豊かなスポーツライフを実現している姿」である。それに向けて、授業レベルで目指す、主体的に学習に取り組む子どもの姿を研究主題に設定することで、イメージを共有し、授業づくりをより具体的に進めていきたいと考える。なお、目指す姿は、「主体的に学習に取り組む態度」を教師が評価規準として想定したものとして考えたい。その評価規準（目指す姿）を想定するためには、文部科学省から出された「『主体的に学習に取り組む態度』の評価」にある、「主体的に学習に取り組む態度」の二つの側面を参考にしたい。

- ① 「知識及び技能」を獲得したり、「思考力、判断力、表現力等」を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとしている側面
- ② ①の粘り強い取組の中で、自らの学習を調整しようとする側面

上記①②の側面から子どもが主体的に学ぶ姿を、想定していく際、「ときめき」「きらめき」という、体育特有（座学では実現が難しいという意）の子どもの姿を定義し、その実現に向けて研究を進めていきたい。

では、「ときめき」「きらめき」という姿は、どのような姿なのであろうか。まず、「ときめき（く）」とは、「喜びや期待のために胸がドキドキする」ことである。体育の授業で言えば、知的好奇心や興味・関心を高め、運動領域や保健領域における自分の課題を解決するために知識及び技能を獲得しようと胸躍らせている状態と捉える。ときめく姿は内的なもので、一見すると、外からは目に見えにくいですが、自ら学習に取り組もうと、学習意欲が高まっている状態と言える。また、「きらめき（く）」とは、「きらきらと光り輝くこと」である。体育の授業で言うと、他者と協働して課題を解決した達成感や自己の成長を感じている姿と捉える。きらめく姿は、仲間にアドバイスをもらったり、話し合っ解決策を考えたりしながら試行錯誤して課題を達成している姿など、仲間と共に光り輝いている姿のことである。これら二つの姿は分かちがたく、単元を通して関連しながら現れる姿であり、上記①の側面を表していると考えられる。

そして、大切なことは、単元が終わっても、ときめき・きらめき「続ける」ことである。そのためには、②にあるように学習を調整する力が必要である。主に「学習課題を考える」「自己の課題に対して適切な解決方法を選んでいるか再考する」「学習の結果から、達成状況を自己評価する」といった自ら学習を調整する子どもたちの姿が見られるように、教師が授業過程を工夫していくことが大切であると考え。

(2) 副主題

－すべての子どもが、運動や健康について自ら見付けた課題を解決できる授業づくり－

現在、体育の授業を行う際に配慮すべきことが山積している。例えば、「運動が得意で積極的に運動を行う子どもとそうでない子どもの二極化」が進んでいることや「障害のある児童などへの指導」、そもそも体育という教科には、勝敗や記録等、数値的結果が子どもの心情に直接影響しやすい教科特性があることなどである。このような状況の中で、すべての子どもが自分の運動や健康における自己の課題を見だし、その解決に向けて学習を行えるように働きかけを検討することは、授業づくりにおいて重要である。

子どもが自ら見付ける自己の課題は、当然、各領域で学ぶべき学習内容に迫る中で見付けていくものでなければならない。領域の特性は学習指導要領解説の「4 各領域の内容」に示されているように、課題解決のどこに楽しみや喜びがあるのかを中心にしながら的確に捉えていく必要がある。例えば、陸上運動領域の走り高跳びでは「どうすれば高く跳べるか」を追究すること、ボール運動のゴール型では「どうすれば相手よりも多く得点を取って勝つか」を追究することに楽しさや喜びがあると言えるだろう。その領域特有の面白さの中に、自分が解決したい課題を見付けられるようにすることで、主題に示した「ときめき きらめき続ける」子どもの姿を実現できると考える。

4 研究の具体について

研究にあたっては、以下のポイントを大切にしたい。

- (1) すべての子どもが領域の特性に触れながら学習内容に迫り、課題解決の楽しさや喜びを感じられる教材設定
 - ・子どもの実態を把握した上で、学習内容を明確にし、スモールステップで成功体験を保障する
- (2) すべての子どもが自己の課題を解決し、達成感を感じられるようにする教師の働きかけ
 - ①子どもが解決したい問い（学習課題）を見いだせるような単元・授業構成等を工夫する
 - ②子どもが課題解決の見通しをもったり、対話を活発に行ったりするための課題解決の視点〈動きを思考するための視点〉の明示化・共有化をする
 - ③子どもが伸びや成果を実感できる自己評価・相互評価・教師の価値づけ等の評価方法を工夫する

- (1) すべての子どもが領域の特性に触れながら学習内容に迫り、課題解決の楽しさや喜びを感じられる教材設定

- ・子どもの実態を把握した上で学習内容を明確にし、スモールステップで成功体験を保障する

子どもが課題解決の喜びを感じ、意欲的に学習できるようにするために欠かせないのは、子どもの実態に応じて、その領域における学習内容が身に付けられるような教材を設定することである。教師が学ばせたいこと（学習内容）を明確にもっていたとしても、それが子どもの意識や運動能力、既習経験と大きくずれてしまっている場合は、その学習効果は期待できないだろう。逆に、子どもの実態を捉え、子どもの声を聞いて教材設定する姿勢をもっていても、教師がその領域で身に付けさせたい力を明確にもたずに子どもの意見に振り回されて教材設定してしまうのでは、それも同じく学習の効果は期待できない。つまり、子どもの実態をしっかり捉

え、子どもの「やってみたい」という思いを大切にしつつ、教師は領域の特性を理解し、学習内容を身に付けられる教材を検討していく必要があるということである。例えば、単元導入前に2学年の系統性を意識しながら子どもの学習経験を調査したり、各領域に関するアンケートをとったりしながら、実態を把握していくことが考えられる。単元に入ってから、形成的授業評価をとったり、毎時間の振り返りの記述や授業中の様相を観察したりすることで、単元前の実態だけでなく単元に入ってから、子どもの実態を丁寧に把握していくことが大切になる。

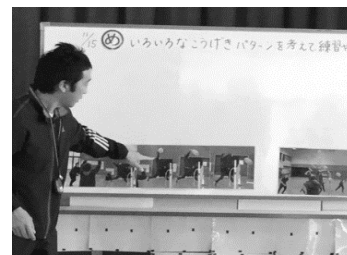
このようにして把握した子どもの実態と学習内容を照らし合わせながら教材を簡易化したり、修正したりしてすべての子どもの成功体験を保障したい。特に、運動を苦手と感じている子どもが、抵抗感を感じずに学習に取り組めるように教材を工夫し、まずは進んで課題解決に向かえるようにしたい。

(2) すべての子どもが自己の課題を解決し、達成感を感じられるようにする教師の働きかけ

①子どもが解決したい問い(学習課題)を見いだせるような単元・授業構成等を工夫する

本研究で目指したいのは、もちろん、主体的に学習に取り組む姿である。「主体的」は、教師から与えられた問いを解決するために「自主的」に取り組む姿ではない。つまり、子ども自身が解決したい問い(学習課題)を解決しようとする姿である。では、子どもが解決したい問いが生まれるようにするために、私たち教師にはどのようなことができるのだろうか。以下に、単元構成や教材との出合わせ方を工夫することで、学習課題を見いだせるようにした実践を紹介する。

昨年度の6年「ソフトバレーボール」の実践では、【前時の児童の振り返りの中から本時のめあてに繋がる意識を意図的に拾い上げ、本時のめあてを設定していった】という提案があった。単元のはじめから前時まで、アタックを決める楽しさに触れられる時間を確保した上で、本時【アタックの連続写真を提示し、アタックするまでの動きの流れを、児童のつぶやきを拾いながらおさえた】ことで、本時の「いろいろな攻撃パターンを考えて練習や試合で使おう」というめあて(学習課題)の妥当性を感じることができていたのである。このように、知識および技能を単元のどのタイミングで習得させ、本時にどのようなデータや結果などの情報を提示することで、子どもが自ら解決したい問いを見いだせるのかを探っていきたい。なお、一単位時間の中だけで問いを見いださせようとするのではなく、単元全体の文脈の中で、子どもの問いがどのように生まれてくるのかを想定していくことに留意したい。



②子どもが課題解決の見通しをもったり、対話を活発に行ったりするための課題解決の視点(動きを思考するための視点)の明示化・共有化をする

以下の表に示しているのは、昨年度見いだされた〈動きを思考するための視点〉である。

学習課題	動き(方)を思考するための視点
ボールを遠くに投げる	ボールの軌道(高さ)、投げる角度
強いアタックを決める	アタックの打つ方向、アタックを打つ位置
アタックにつながる動き	トスを上げる位置、アタックを打つ位置、アタックの様相
ラリーを続ける	軌道、強弱、打点、空間、動き方
強く速い球を打ち返す	ボールを捉える位置
腕支持や順次接触	正しい動きをイメージできる生き物
強いスパイクを決める	オープンスペース
リズムカルなハードリング	足のリズム、走りのリズム
踏み切りの仕方	片足と両足で跳んだ高さや距離
心と体の関係(変化)	人数や動きの変化

前頁の表にある課題解決の視点は、動きを思考することはもちろん、課題解決に向かう対話を行う際にも、重要なキーワードになる。

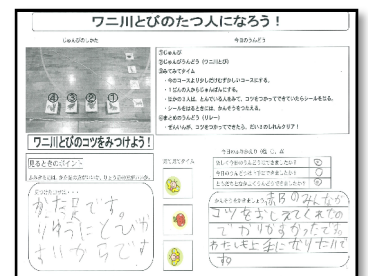
第3年「ネット型」・フロアバレーボールの実践では、【自陣で攻撃を組み立てるときのボールを持たない人の位置や役割を認識するために、「アタックへつながる動き」に焦点化した。その中で、①「どこからアタックを打つといいか」、②「どのようなアタックが得点になりやすいか」、③「どこからアタックへつながるパスを出すとよいか」を視点とした】ことで、課題解決に向かった。さらに【得点しやすいアタックについて、「強さ」「方向」「場所」「手の形」といったキーワードを用い、共通理解する】ことで、子どもが思考し、得点することができた。さらに、【チーム毎に自分の名前の付いたマグネットと作戦ボードを配布することで、一人ひとりの位置や役割分担を明確にすることができ、児童間での対話的な学習へのツール】で対話を行ったことにより、上記二つの視点がキーワードになって対話が促された。



そこで、本年度は〈動きを思考するための視点〉を、「課題解決の視点」として広く捉え、動きを思考したり、対話のキーワードにしたりすることで、誰もが課題解決の見通しをもって解決に向かえるようにしたい。

③子どもが伸びや成果を実感できる自己評価・相互評価・教師の価値づけ等の評価方法を工夫する

2年「走・跳の運動遊び」の実践では、ワークシートを用いて、【①楽しく今日の運動はできましたか②今日の運動は上手にできましたか③友達と仲良く運動できましたか】という観点を明示して自己評価させることで、「する」だけでなく、「みる」「支える」「知る」などの体育の見方・考え方が働くように振り返りを行い、成果を多様な観点から振り返ることができるようにしていた。さらに、【みてみてタイム（振り返り）の時に、シールを貼って、児童の相互評価を行った】。ことで、友達と肯定的なコメントを伝え合う相互評価を行うことで、自分の取組を認めてもらったり、協働のよさを振り返ったりし、子どもが自分の伸びや成果を実感できる働きかけになっていた。



上記実践例は、授業終末の振り返りの場面での評価であったが、課題を解決しているゲーム中や、練習中にも効果的な評価を行うことができるだろう。その評価の仕方については今後も検討し、さらに伸びや成果を実感できる方法を探りたい。

参考文献

小学校学習指導要領解説体育編

国立教育政策研究所編「資質・能力〔理論編〕」，東洋館出版社，2016

鹿毛雅治著「学習意欲の理論―動機づけの教育心理学」，金子書房，2013

梅澤秋久・苜野一徳編著『真正の「共生体育」をつくる』，大修館書店，2020

田村学著「授業を磨く」，東洋館出版社，2015

令和元年度 全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果（児童生徒に対する調査・香川県の概要）香川県教育センター
文部科学省 「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）の概要」，2019